

北タイ情報誌『ちゃ～お』の17年を振り返る

古川節子

『ちゃ～お』の概要と読者層

媒体名：ちゃ～お

出版年：2003年から2020年まで

出版者：—

出版地：タイ・チェンマイ県

判型：A3

刊行頻度：月2回刊

ウェブ：—



北タイ情報誌『ちゃ～お』は、タイ北部に位置するチェンマイ県で発行された日本語による無料情報誌である。発行期間は、2003年から2020年までの17年間、全407号になる。発行日は、毎月10日と25日の月2回、配布先は在住日本人や日本人観光客の目に触れやすいチェンマイ市内のホテルやスーパーマーケット、レストラン、スパ、カフェ、コンドミニウム、ゴルフ場、旅行会社などで、県外ではチェンラーイ県の日本人会、一時的にバンコクにも配布し、日本では東京都神保町のアジア文庫で取り扱われた。

サイズはA3判で、見開きページには旧市街を中心に南東から北西にパスをかけた市街地図を掲載した。2005年頃より旧市街東部に位置するニマーンハーミン通りが新たなショッピング通りとして賑わい始め、本誌では2009年(154号～)からニマーンハーミン通りの拡大地図を掲載。店紹介のコラムなど、誌面で紹介した場所は地図上に印を付け、記事とリンクさせた。タイ国内外に定期購読者があり、毎号4,000部から多い時には6,000部を発行し、配布した。

チェンマイはタイの首都バンコクから北に約720キロに位置するタイ北部の中心地である。2000年頃より、定年退職後にリタイアメントビザを取得して長期滞在をする、

いわゆるロングステイヤーが増え始めた。正確な人数は定かではないが、総領事館に定住届を提出する邦人は、チェンマイ県をはじめとするタイ北部9県で3,000~4,000人程度で、その内訳としては、現地の配偶者を得て定住する人や企業から赴任している会社員以外に、長期で滞在するロングステイヤーの割合も多い。2011年の本誌の記事に、「チェンマイ商工会議所は、2011年現在3,000人のロングステイヤーを、2017年には10,000人にしたい」という記述があり、ロングステイヤーを積極的に誘致しようという現地側の取り組みも行われていた。

そのようなロングステイヤーを中心に、定住者、及び観光客を対象にして、2003年3月、初代編集長である山内恵二氏によって『ちゃ〜お』の前身となる『One-Two Chiangmai』という日本語の無料情報誌が創刊された。筆者もこの年よりライターとして投稿し、翌年からは編集に携わるようになった。当初はまだインターネットはさほど普及しておらず、筆者は原稿用紙に手書きで入稿していた。在住日本人の多くが海外生活のなかで活字に飢えている時代だった。

なお、当時のチェンマイには、『ヴィアン・チェンマイ(Viang Chiangmai)』、『ランナー・エクスプローラー(Lanna Explorer)』、『freecopymap チェンマイ版』、『ロングステイ』、『スワンナプーム(Suvarnabhumi) タイ・英・日』など、複数の日本語情報誌が発行されていた。

2015年頃にはタイ社会におけるスマートフォンの使用率が50%近くになり、SNSも広く一般的に使われるようになった。チェンマイの街にはお洒落で写真映えのするショップやレストランが次々とオープンし、若い女性観光客からも人気の海外旅行先として認識を得るようになった。そんな女性観光客をターゲットにした『Lanna Runna』という日本語のフリーペーパーも(『freecopymap チェンマイ版』より移行)も2015年に創刊されている。

他の日本語情報誌は比較的短期間で撤退する中、『ちゃ〜お』は最も長い期間発行を継続できたが、2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックによって休刊を余儀なくされた。

筆者は、2003年から休刊となった2020年まで、本誌の執筆と編集に携わった立場より、これまでの『ちゃ〜お』を振り返ってみたい。

タイの古都チェンマイについて

最初に、『ちゃ〜お』が発行されているチェンマイの特徴について簡単に紹介したい。

チェンマイ県の総面積は日本の四国ほどで、その約70%が森林地帯である。人口は170万人(2017年)、中心部となるムアン郡の人口は23.42万人(2014年)と、人口567万人(2020年)の首都バンコクに比べるとごく小さな地方都市である。しかし、13世紀頃よりランナー・タイ王国の中心地として栄え、現在もタイ北部の中心都市であることなどから、バンコクに次ぐタイ第二の都市とされている。

タイ北部とはチェンマイを中心に、チェンラーイ、メーホーンソーン、プレー、ナーン、ランプーン、ランパーン、パヤオ、ウッタラディットの9県を指す。チェンマイに隣接するランプーン県には北部工業団地があり、40社近い日系企業の生産工場が存在する。チェンマイからは車で30分程度と近いので、チェンマイに駐在して通う日本人社員も多い。また、タイ北部の一部はラオスやミャンマーと国境を接し、中国雲南省にも近く、昔からそれら近隣国との関わりや文化的影響が大きい。「コンムアン」と呼ばれるいわゆるチェンマイ人をはじめ、現在はコンムアンに取り込まれている他のタイ族（タイルーやタイクーン、タイヤイなど）、それぞれに異なる言語と文化を持つ山岳民族など、多様な文化が混在する土地である。

ちなみに、本誌の名称の『ちゃ〜お』とは、チェンマイの女性が話し言葉の最後に付ける方言で、日本語の「です」と同じような意味を持つ。たおやかなチェンマイの女性らしい響きを持つ言葉である。

タイは仏教国で、国民の約9割が仏教徒である。タイ人の生活習慣や考え方の中には仏教の教えが息づいているが、地方都市であるチェンマイではその傾向がより強まる。さらに、バンコクやプーケットに比べると物価が安く、気候は涼しく過ごしやすい。特に11月から1月の乾季の平均気温は25度程度で、雨もほとんど降らない。このハイシーズンに、日本の寒さを逃れてチェンマイで過ごし、チェンマイが最も暑くなる3~4月頃は帰国、というサイクルで、タイと日本を行き来するロングステイヤーは多い。本誌もその動きに合わせ、ハイシーズンには増刷する年が多かった。

一片約1.8kmの四角いお堀に囲まれた旧市街は、1296年にマンラーイ王によって建造された。街の中心に位置する旧市街の東側をピン川が流れ、西側にはステープ山がそびえている。旧市街周辺には、銀や漆細工、仏像を作る職人が住むエリアがあり、郊外のサンカンペーンやハーンドンでも、紙や木工、織り、染めなどの産業が盛んである。チェンマイの主な産業は農業だが、市街地に関していえば、観光業が大きな割合をしめる。川に灯籠を流すローイクラトン祭りやタイの旧正月ソクラーンなどの伝統行事に加え、フラワーフェスティバル、傘祭りなど、乾季は特に華やかなイベントが多く、それを目的に大勢の観光客が訪れる。そしてその期間は地場産業の工芸品が街中に飾られ、彩りを添えるのである。

このようなチェンマイの豊かな自然や文化、穏やかな街の雰囲気、それから、お年寄りを敬い、子供を可愛がる人々のホスピタリティに癒しを感じる日本人は今も多い。

多彩なライター陣による読み物

本誌は全16ページで構成されている（2014年は一時的に18ページに増）。1~3ページの巻頭特集記事については後ほど述べるとして、まずは毎月の連載コラムについて紹介したい。

連載コラムは基本的に月一回の掲載で、テーマや文字数によって奇数号と偶数号とに

分けられた。4、5、12、13 ページのモノクロページには、文字数 2,000～3,000 字程度の読みごたえのあるコラムを掲載した。

例えば、タイ文学者で翻訳家の岩城雄次郎氏の「タイ王国万華鏡(183号～)」や、大山八三郎氏の「チェンマイ滞在半世紀(185号～)」、俳人山田藍花(本名坂本真理)氏の「チェンマイ俳句散歩」、佐保美恵子氏の「I Love Chiangmai なにゆえ Chiangmai」や筆者の「いい顔みつけた」のインタビュー記事などである。

特に「タイ王国万華鏡」は、岩城雄次郎氏が個人的な付き合いのあったタイ文学者との交流を回想しながらタイ文学を紹介する随筆で、60年代から80年代頃のタイ社会の雰囲気と各文学者の人となりを生き生きと伝えた。また、大山八三郎氏の「チェンマイ滞在半世紀」は、大山氏がタイに住み始めた1958年に体験した出家の話や、南方漆調査団の通訳として初めて訪れたチェンマイでの日本人写真師田中盛之助氏との出会い、チェンマイ漆やスンコロク陶の再興、そして、現在は工芸品の産地として知られるサンカンペーンの工芸産業の礎を築いたチェンマイ・ハンディクラフト社設立の経緯などが記されている。ちなみに、有名な玉本事件の玉本と間違えられたという話もあり、今読んでも興味深い内容だ。

また、月2回、毎号欠かさず掲載する連載もあった。本誌の主たる読者は先に述べたようにロングステイヤーであるが、在住5年、10年と滞在年月を重ねたロングステイヤーの中には、タイ語を習得し、自ら車を運転して郊外の温泉や辺鄙な観光地に出向き、積極的に現地の社会に溶け込んで暮らす人が多い。その一方で、社交が不得手で社会的にも経済的にも孤立してしまうロングステイヤーも少なくない。タイには不法な性産業や麻薬の密売など闇社会のビジネスが根深く存在する。女性を目的に北タイを訪れる日本人男性や、そうではないにしても孤独な年配の邦人が詐欺にあう被害が、チェンマイでは毎年のように起きている。山内恵二氏によるコラム「ロングステイ光と影」は、ロングステイヤーが気を付けるべき問題や具体的な事例を取り上げ、読者の関心を集めた。

読者からの反響が最も顕著だったのは、「気になるお店」というコラムである。毎号2店舗ずつ紹介するこのコラムでは、屋台や食堂、レストラン、カフェなど、チェンマイの食を中心に、雑貨店やマッサージ店など幅広いジャンルの店を紹介した。発行日の後は、掲載号を手にとって店を訪れる読者が後を絶たず、掲載店からは毎度感謝の声が届いた。

それから、「最新地元新聞ニュース」と「掲示板・インフォメーション」は、現地の暮らしに役立つ情報を掲載したタウン誌ならではのページである。前者の「最新地元新聞ニュース」は、チェンマイで発行されていた『Chiangmai News』と『Thai News』の2紙の新聞よりピックアップしたニュースを翻訳して掲載。三面記事的ニュースが多数含まれており、そこに日本とは異なるタイらしさがにじみ出ていることもあってか、読者の関心を集めた。掲示板には、チェンマイ在住者の会、CLL(チェンマイ・ロングステイ・ライフ・クラブ)、福祉の会、日本人会、日本人補習校などからの告知が掲載さ

れ、文字通り定住者の「掲示板」的役割を担った。

ここで、月に一度ずつ交互に掲載していた本誌の看板コラムともいえる高橋敏氏の「きまぐれ一発コラム」と、三輪隆氏の「さくら寮日誌」を紹介したい。

「きまぐれ一発コラム」は、本誌の後期編集長である高橋敏氏による穴場的観光スポットやリス族の美少女姉妹との残念な話など、独自のセンスでセレクトされた場所や体験談が味のある文章で綴られた。ほぼ全員が素人のライター集団による本誌は、同人誌的要素が強かったが、高橋氏はタイに来る以前に南米音楽の雑誌編集の経験があり、『ちゃ〜お』はその編集ノウハウによってある一定の質を保つことができたと筆者は考える。

三輪隆氏は外部ライターであるが、長期に渡り、ほぼ毎号寄稿して頂いた。三輪氏もまた、元編集者兼文筆家で、プロのカメラマンでもあり、『世界美少女図鑑アジア編タイ北部黄金の三角地帯』など、少数民族を紹介する本を出版している。チェンラーイ県にて山岳民族の教育を支援する「さくらプロジェクト」を運営し、そこで起きるさまざまな出来事や問題を、軽快な文章で綴った。もうひとつ、三輪氏担当のコラム「タイの山岳民族」では、北タイに住む山岳民族を、主な7つの民族はもちろん、そこからさらに派生するグループごとの衣・食・住や、冠婚葬祭、儀式などが、毎回各テーマに分けて丁寧に紹介された。三輪氏が撮影する少数民族の少女たちの写真のファンは多い。ともすれば街以上に大きな変化の渦中にあるタイ北部の山岳民族の、二度と見るできないであろう姿を詳細に記録した写真と文章は、将来大きな価値を持つと考えられる。この2人の書き手が本誌をしっかりと支えていたおかげで、筆者は安心して自分の興味のあることを何でも自由に書かせてもらうことができた。

タイ人のライターによる連載も少ないが何本かあった。中でも2006年から休刊号まで、14年間にわたって連載が続いたのが、タイの教育や社会問題を綴った「ソンバット先生のLIFE&WORK」である。チェンマイ大学医学部心理学博士という肩書を持つソンバット・タパンヤー氏原稿は、毎月タイ語から日本語に翻訳して掲載した。ソンバット氏は合気道の黒帯保持者でもあり、自宅に建てた道場で近所の子供たちに自ら稽古をつけている。そんな自らが取り組む社会活動やタイ国内外の学会の報告、タイにおけるいじめや自殺、家庭内暴力の現状など、住んでいてもなかなか知ることのできないタイ北部の社会問題について伝えた。

カラー面には、先に述べた「市街地図」や「気になるお店」のほか、岡本麻里氏の北部料理やタイ菓子など、主に食にまつわるコラムが掲載された。食は何よりも読者の興味を引くテーマであるため、おいそうな食べ物の写真はカラー面に相応しい。岡本氏は初期の頃より本誌の編集部で活動していたが、一時帰国に際し一旦離れ、再度チェンマイに戻ってからは外部ライターとしてコラムや特集記事の寄稿を続けた。タイ関連の日本の雑誌や本の執筆など、現在もフリーで活躍中である。

他にも、齢60を超えた中村正太郎氏の「飲んべえ親父のチェンマイ子育て物語」、カレン族の女性と結婚した吉田清氏が綴る村の暮らし「クンター流カレン族生活体験」、

チェンラーイ県在住ライターの水野うしお氏のエッセイ「微笑むつづら」、アカ族女性と結婚し、アカ族の村の暮らしをレポートした村岸田一氏の「ミャンマー国境アカ族村通信」、元理科教師のなお氏による象使い日記「象使いに魅せられて、メータマンからの CHANG 通信」、タイ仏教翻訳家浦崎雅代氏の翻訳による、原始仏教を分かりやすく説いたパイサーン和尚の説教「今ここを生きる智慧」、大熊あゆみ氏と料理家パーター(ジャムニヤン・イヤムジャルン)氏による「ターお婆さんのベジキッチン」、長田繁人氏のランナーの仏教美術を紹介した「見つけた！ ランナーのかたち」、あさひらようこ氏の日帰り列車のススメ「となりの駅には何がある？」、チェンマイの季節を綴る花岡安佐枝氏の「チェンマイ季節ノート」、画家ポンパン・ルアンナンチャイ氏の絵画を紹介する「ランナー絵画」、その他、在日本領事館便り、北タイの野鳥、花、工芸、4コマ漫画、ルーシーダットン、お土産、北部のことわざ、チェンマイ生活記……などなど、全てをあげることはできないがバラエティ豊かなコラムが目白押しであった。

さらに、ユニークな経歴を持つタイ在住の「長老」たちも奮って寄稿してくれた。

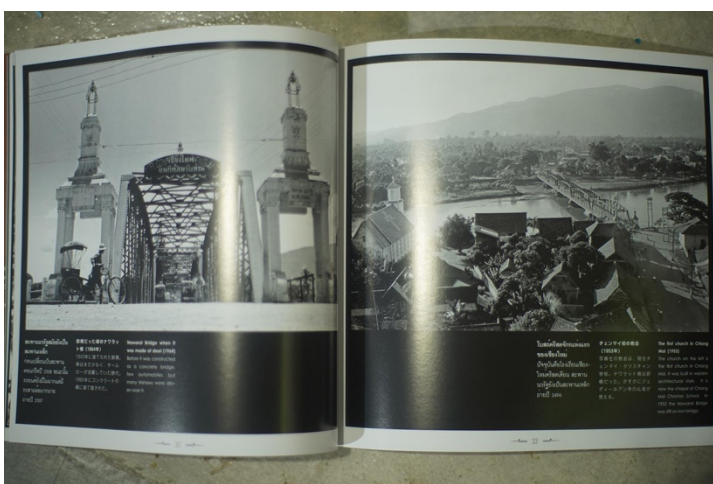
タイ南部プーケットにて日本人医師の父とタイ人の母の間に生まれた、バンコク在住報道カメラマン瀬戸正夫氏(1931年生)の「タイの戦火を生きて」や、元航空系技術者でタイ人配偶者とのタイ在住20年を綴るロバート・H・スガ氏(1928年生)のエッセイ「私の昔話」、テレビ映像コーディネーターの面高昌男氏(1938年生)が、仕事で訪れた現地の子供たちを撮り集めたフォトエッセイ「アジアの子供たち」などである。ちなみに、面高氏の連載より、『やあ！ アジアの子供たち』という写真集を2013年に本誌の出版部門である CHAO BOOKS から発行している。

ここで少し、筆者が担当したコラムの中で、個人的に思い入れのあるものについて言及させていただきたい。それは、1920年代から1960年代のチェンマイを切り取った1枚のモノクロ写真と、その写真にまつわるエピソードを綴った「ブンスームさんの写真館」という連載である。「ブンスームさん」こと、ブンスーム・サータラーパイ氏は、1928年チェンマイに生まれ、チェンマイで新聞記者や編集長を務め、定年後も執筆や古い写真の収集をしていた(特集346号で紹介)。最初は穴埋め的に始まったコラムだったが、毎号ブンスーム氏と1枚の写真を選び、聞き語りで文をまとめ、気がつく連載8年全180回という息の長いコラムとなった。

2011年2月には本誌企画の写真展「ブンスームさんの写真館」を開催(特集188、189号で紹介)した。それは、編集部にとっては、誌面から外に出て、実際に読者と関わりを持つことができた貴重な機会となった。きっかけは、ブンスーム氏の親戚が管理する築100年の旧シープラガートホテルの建物が老朽化で壊されると聞き、その前に記念としてブンスーム氏の写真展を行えないかと相談したことに始まる。

オープニングイベントには、在チェンマイ日本国総領事館から柴田和夫総領事が挨拶に訪れ、ブンスーム氏本人が読者に直接写真の説明をするツアーや、餅つき大会、ラーナー舞踊や音楽の演奏会も行い、読者の日本人も地元タイ人も大勢集まった。展覧会は好評を博し、開催日程を1カ月延長。地元レストランや商店から協賛金を得て、写真展にちなんだ写真集『思い出のチェンマイ』をCHAO BOOKSより出版した。

この写真展では旧ホテルの客室を利用し、部屋ごとにテーマを持たせた展示を行った。一番手前の部屋は「田中写真館」と名付け、実際にこのホテルのすぐ側にあった日本人写真師



田中盛之助氏の写真館で撮影された写真を展示した。部屋の奥の壁には光沢のあるカーテンを飾り、昔の写真館風に設え、訪れた人がブンスーム氏と記念写真が撮れるようにした。開催中のある日、偶然、田中氏の孫娘にあたるという年配の女性が訪れるという嬉しい出来事もあった。その時にブンスーム氏と交わされた会話は189号特集に掲載している。ちなみにその建物は、現在もクラフト雑貨やコーヒー、アート等のイベント会場として、修復を重ねながら保存運営されている。

「北タイ愛」の詰まった特集記事

ここからは、『ちゃ〜お』の表紙を飾る特集記事について述べたい。本誌の表紙には、「ちょっとディープな北タイ情報誌」と銘打っているだけあり、特集記事は、北タイをテーマごとに掘り下げたマニアックなものが多い。

その内容は多岐にわたるが、バイクツーリング、知られざる秘湯探訪、洞窟探検、国境の旅や近隣諸国への旅など、特に中年男性のロマンあふれる紀行ものは、『ちゃ〜お』において無くてはならない特集テーマであった。特に初期の頃は、前期編集長山内恵二氏の類まれな行動力が発揮され、その無茶ぶりがひとつの魅力として読者をひきつけた。

そのほかに、タウン誌らしいエリアごとの「街案内」、北部料理やタイヤイ料理、発酵食品、旬の果物などの「食」、銀細工や漆、紙、竹、織物、土器などタイ北部の「伝統工芸」、ランナー様式の寺や舞踊、冠婚葬祭、伝統行事などの「伝統文化」、コーヒーやお茶、苺やラムヤイ（龍眼）などタイ北部の「特産物」、少数民族ごとの暮らしや文化など、北タイを紹介する内容にこだわりながら、様々なカテゴリーの特集が組まれた。また、山岳民族や野鳥コラムなど、普段は文字数に制限があるコラムを特集記事に拡張し、いつもと違う視点で紹介することもあった。

8月10日号は、終戦日にちなんだ特集（「クンユアムの日本兵の思い出(272号)」「そのとき日本兵がクンユアムにやってきた(296)」等）を組み、第二次世界大戦中にインパール作戦で北タイを訪れた日本兵について、当時を知る現地の年配者の貴重な話や資料を掲載した。

編集部で手分けをして特集を組むときは、編集会議で誰が何を担当するのか文字数まで細かく決定したが、個人で担当する時は、取材をしながらまとめていくことも多かった。筆者は、できる限り体験すること、例えば、舞踊や工芸を紹介するときは実際に習ってみる、触れさせてもらうなど、身体で得た感覚をレポートするよう心がけた。

しかし、特集記事は少数のライターが続けて書くよりも、それぞれ異なる持ち味のある多様な書き手に寄稿してもらう方が、読者を飽きさせず、より深みのある誌面作りが可能になるため、外部の執筆者への依頼は重要だった。有難いことに、調査や研究をするために定期的にチェンマイを訪れる各分野の研究者や大学院生に、最新の研究成果や長い時間をかけて調査をして得た貴重な研究内容を、基礎知識のない一般読者にも読みやすく紐解いた特集記事として寄稿してもらうことができた。例えば、奥井悠氏の「焼畑農業の行方(217号)

）、「コーヒーとエコツーリズムで村おこし(263号)」、坂本真理氏「多民族をつなぐタイルーの布(274号)」、馬場雄司氏「竹と稲魂のハーモニー(288号)」、二文字屋脩氏によるムラブリ族の現状レポート「禪と槍と森と 前・後編(290、291号)」、西田昌之氏「ルアンパバーンのどぶろくは母の味(297号)」、「北タイの精霊王カムデー王伝説を追え！(406号)」、伊藤悟氏「ソー・ランナー 北タイの意気を歌に掛け合う 前・後編(353、354号)」、御園明里氏「精霊と暮らす家(368号)」など、タイトルを見ただけでも読んでみたくなるような興味深い内容である。

他にも、全ての名をあげることはできないが、「北タイ愛」にあふれる大勢の書き手達に特集記事を寄稿していただき、毎回、充実した内容の原稿を受け取る度に編集者として大きな喜びを感じた。

運営悪化の原因

さて、ここからは、『ちゃ〜お』が休刊に至った原因について考えてみたい。そもそも最大時でも1万人弱程度の邦人しかいないチェンマイには、無料配布の情報誌

が広告収入によって利益を上げるビジネスモデル、つまり、日本語のフリーペーパーが成り立つだけのマーケット自体が、もとより存在していなかったといえるだろう。実際、本誌の発行運営担当者(1~38号山内恵二氏、39~153号谷口潤二氏、154~407号高橋敏氏)のうち、山内氏と谷口氏の6年半、高橋氏の最初の1年間と最後の1年間は赤字経営であった。

そんな状況下で、本誌が奇跡的に長く発行できた理由は、団塊の世代の定年退職者が増加した時期と重なり、それによるロングステイヤー増加の波の恩恵を受けたこと、実質的なオフィスを持たず、多い時は8人ほどいた編集スタッフから、3人という最小限のスタッフによる編集と営業の努力によって、約十年間かろうじて収益をあげてきたことがあげられる。

最終的に休刊に踏み切る決め手となったのは、先にも述べたように、新型コロナウイルスのパンデミックが直接の原因である。しかし、それはむしろ決断の機会を与えるきっかけでしかなく、経営自体は2018年頃より芳しくなかった。当時のマーケット減少の原因には、団塊世代の高齢化にともなう帰国者の増加、円安の進行によるタイでの収入減(パーツ建てによる年金額の減少)、円安や定年の延長化による新規ロングステイヤーの減少、移住的長期ロングステイから短期シーズンステイへの変化、などがあげられる。また、日本人ロングステイヤーに代わるようにして、中国人の長期滞在者や観光客が激増、チェンマイの街には中国語の看板が溢れ、中国語のフリーペーパーも出現し、日本人在住者の存在感は薄れるばかりであった。そして、2020年の新型コロナで、マーケットとスポンサーの完全消滅が起きたのである。

インターネットや携帯電話の普及による紙媒体全体の需要の減少も、多少の影響があるといえるだろう。日本でも、2011年以降、紙媒体の需要が下がり続けているそうだが、タイでも近年のスマホやSNSの普及はめざましいものがあり、数多くの老舗新聞や雑誌が廃刊になったり、オンライン新聞に移行したりしている。広告主もSNSなどで独自に広告を出すようになり、紙媒体に比べ直接反応が見えるネット上の宣伝への切り替えが起きている。さらにコロナ禍により、紙媒体からネット化への移行が必然的に加速した。

スポンサーのほうから広告掲載の問い合わせが入る良い時代もあったが、徐々に減少し、2018年後半には広告掲載の打ち切りが相次いだ。発行部数を減らし、少しでも価格の安い紙に変更したところで経営状況は逼迫、2019年には印刷費が出るか出ないかの状況下でなんとか発行を続けていたが、2020年3月、タイ政府による新型コロナ感染症拡大防止対策により、陸空全ての国境が封鎖。急遽、帰国を決断するロングステイヤーも多く、読者もスポンサーも不在のなか、本誌は休刊に至った。その後も約2年間、渡航に多額の保険や検査、2週間の隔離等が必要となり、タイの出入国が実質困難になった。本誌にもホームページやFacebookがあり、コロナ以前は発行の通知や店紹介など幾つかのコラムを細々と更新していたが、コロナ以降はFacebookの運営に専念して

いる。しかし、マーケットが縮小したままの状況において収益に結びつけることは難しい。

2023 年になり、コロナは幾分収束を迎えた。日本人ロングステイヤーも戻り始めている。しかし、これを機に、コロナの間借りっぱなしにしていたコンドミニウムを引き揚げ、本帰国を決断した人も多い。本誌だけが休刊に至ったわけではなく、長くチェンマイで存在感を誇っていた『City Life』などの英語の無料情報誌や、複数あったタイ語のフリーコピーも全て姿を消した。バンコクのような大都市ならまだしも、小さな観光都市で、ホテルやツアーなど観光業に携わる人々と同じように、『ちゃ〜お』もまた、コロナという大きなふるいによって振り落とされたひとつに過ぎないのである。

最後に

『ちゃ〜お』の表紙には毎回カラーで大きく写真をレイアウトしており、発行日に配布先に積み上げられているとそれなりの存在感があった。リンピンという在住日本人が多く利用するスーパーマーケットには重点的に配布していたが、発行日を楽しみに待つ読者はもちろん、日本語が読めない現地のタイ人までが持ち帰り、いつも即日中に無くなった。未だに日本人旅行者から『ちゃ〜お』の配布先を教えて欲しいという問い合わせがある。チェンマイ好きの日本人には、それなりに知られた情報誌だったのではないかと思う。

創刊した 2003 年から 20 年経った。その間、チェンマイもゆっくりではあるが、大きく変化した。初期の頃の地図面を広げてみてもらえば、それは一目瞭然である。創刊当初は洒落たカフェなどどこにもなく、街に一軒新しいカフェがオープンすると大喜びで取材に駆け付けたものだ。現在のチェンマイは、タイ国内で最もカフェの多い街といわれるようになった。そして、3~4 月には、山焼きを原因とする煙害による大気汚染が世界一位を誇る日もあり、それもまた、創刊当初はなかった現象である。人口の増加や大企業による大規模農業が深刻な環境問題を引き起こしているが、一向に解決できないでいる。

コロナがほぼ収束した今もなお、街にはシャッターが下りたままの店は多い。一時的に中国人観光客が減少している今、ひと昔前の長閑なチェンマイに戻ったようだという人もいるが、それも数カ月も経たないうちに状況は変化していくのだろう。

チェンマイは、日本のメディアではよく「タイの京都」と称される。確かに、旧市街には約 40 もの寺が建ち、市街地周辺は景観保護のため建物の高さに制限が課され、歴史ある街を世界遺産に登録しようという運動も行われている。しかし、京都にみるような蓄積された歴史が醸し出す風情からはほど遠く、文化的景観が保たれているとは言い難い。どちらかというとその逆で、ごちゃごちゃして大雑把かもしれないが、力の抜けたゆるさが持ち味だと筆者は感じている。チェンマイの良さは、むしろ人の暮らしの中にあるのかもしれない。衣食住などに見ることのできる伝統的な暮らしや文化や信仰に

は、確かに古都チェンマイに長い年月を経て伝わっている大切なものがあるように思われる。

とにかく、17年間続けていてもネタに尽きることはなかった。それほど多様な文化が息づく魅力にあふれた場所なのだという事は、本誌の仕事を通して筆者が実感しているところである。この小さな地方都市、あるいは北タイという地域性の持つ、一言で言い表すことのできない良さを、毎号、さまざまな切り口で見える形にして届けてきた『ちゃ〜お』には、チェンマイの魅力やどのように変化したのかを知る手がかりが何かしら残されているのではないかと思う。チェンマイをこよなく愛す日本人たちが見てきた17年間の記録として、この度、京都大学東南アジア地域研究研究所図書室に保管していただくことを、一編集者として心から感謝したい。

